파9C19

18-865

世子猿樂談儀校註の小序

世子十以後申樂談儀は、當道無雙の寶典なり、然るに、何の故にや、埋沒久しきに及び、是の如き前賢の垂訓の遺編も、存滅、從來、殆と絶るべからず、彼の座中、者流の子孫すら、皆已に之を逸し、博搜の士、亦之に援及せる者少かりき、潛晦想ふべし、今、能樂文學研究の事を興すに方り、偶、本書を獲たり、其の久年の幽光を顯揚して、當道の維持に資益すると必せり、即、活版に附して手寫に代へ、以て同好に頒與す、

本書は、後尾を殘闕し、完本に非ず、又、往々誤脫あり、字句疑似に涉る者多し、而も、他本異本の校勘に供ふべき者なし、今、小杉氏の原本に因り、字句の校定、並びに傍註をば、吉田氏の考案に假り、以て此の校註本を造り、印刷に附するのみ、他日、古本完本を發見し、又、註釋の全備を得るに及ばゝ、更に校定する所あらんとす、

小杉氏は、安政中、故人黑川春村翁に就いて、本書を借り寫されしとも聞きたれば、頃日吉田氏は、黑川家に至り原本の有無を訪ねられしに、今は書庫中に無しと也、但、春村翁の遺草なる猿樂考證土代と題する編冊を檢するに、所在に世子談儀を引據したる痕跡斑々たり、且、春村翁も晩年に至り本書を獲、之に因りて從前の稿文に追補し變改する所あらんとせる狀、歷々認むべかりしと云ふ、又、考證土代に、談儀の文「竹田の座と、あいの座」云々を引き、てあい之座と爲し、てあいは手貝の訛（東大寺礒礪門の邊をいふ、今も手貝、又手搔と呼ばゝ）歟と曰はれたりとぞ、字句點畫の異同に、毫厘千里の差あること想ふべし、如是の訛誤疑似のもの、一に識者の論議に待つ、

本書の由來、及び價値については、吉田氏の所說あり、能樂第六卷第六號に載す、左に轉載して參考に供す、

明治四十一年六月

「能樂」編　者

（參考）

世子六十以後申樂談儀につきて

左の一篇は、四月二十日、能樂文學研究會の席上、吉田東伍君の演說せられしを、野村袋川氏の筆記されしものなり、

此書、觀世座の世阿彌談儀は、小杉榲邨氏の徵古雜抄の中に收むるものにて、予は去る卅八年、同氏より借りて寫し置きたり。予は一見駭き且怪み、爾來數回讀誦、色々と之を他書と比較して調べ考へみたるに、如何にも貴重すべき古典にして、足利時代の猿樂、殊に其の創めて成立したる頃の事情は、此書以外にては、斷じて明白ならざるを悟れり。洵に有力なる能樂歷史の根本資料たり。

（筆者曰、此書は「塙家の原本に依りて、黑川春村翁の寫されしを、小杉氏が今より五十年前、安政の交、翁より更に借りて寫されしにて、翁の話に、猿樂の事は此書以上に精確なる者なしと語られき、又、原書は續群書類從に收められし筈」との小杉氏の直話あり、然れども、吉田東伍氏の說にては、岩崎家靜嘉堂の續群書類從に引合せたるに、此書は全く無しと也。）

今大略、その然る所以を說かんに、此書の聞き手、即作者は秦の元能とあり、元能は普通の觀世系圖に無し、但、世子の嫡子十郎大夫元雅はあり。觀阿彌、世阿彌、音阿彌を三代と數へ、二代世阿彌は大夫職を甥音阿彌元重に讓れりと傳へてあるが、其の之を元雅に讓らざりし葛藤は明白ならず。即、此の元能と世阿（二代）音阿（三代）の干係は、何書にも說明皆無也。但、此談儀中に、元雅作と傳へらるる所の隅田川の能の亡者につきて、

世子は、元雅は「えすましき」由を申さる、かやうの事は、して見て善につくべし、

との語ありて、元能と元雅は別人たること、文意を推して明確に判斷せらる（是れは、元雅が亡兒の幽靈を登場せしめし事につき、世子は其の幽靈出現を否みしと也）。又、永享元年三月薪能の事を記せる註に、觀世大夫元雅とあり。而も、永享五年、音阿彌が大夫と爲り、卅六歲にて河原の能をなすとは、蔭涼軒日錄に見えて、此間に於

て大夫の世繼は代れり。然らば、元雅が、兎に角、三代目の樂頭を受けたる事は明かなり。則、今の觀世の系圖に元雅を代に數へぬは、之を忘れたるか、若くは故ありて省ける也。是れらの證跡によりて推し考ふれば、元能は音阿彌元重と同人に似たり。殊に書中の或人といふ語の註に三郎とあるは、即聞き手の元能にして、即三郎大夫入道音阿彌の一字ならん。今、元能改名して元重と爲るといふは、予の臆斷なれど、しか考へざれば蓋し穩當ならず。

凡そ古書を見るには、先その文體と事實とよりて眞僞を判すべし。此書は假名書の物語にて、當時にも多く例ある文體に成り、詞遣も、猿樂專門の術語あり、時代的の俗語もあり。かた〳〵、之を現行の花傳書や、（僞書）續群書類從の申樂聞書などに比較すれば、古朴簡實、固より同日の談に非ず。又、史傳事實の方面より考ふるも、近世流布の俗說や、觀世家に追錄せる系譜などとは頗る異なり。故に予は『是れ、世子六十以後、元雅を廢嫡して、元能を立てたる頃に成れる、一子相傳の書にて、能樂研究の基礎となるべきもの』と思惟す。

內容につきて、予は固より藝術上の素人にして、一向に分らねど、冒頭にまづ「遊樂の事は一切の物眞似也、舞歌二曲の風體、翁を以て根本とす」云々とある文段をよむに、普通の由來書の如き神怪不思議も無く、虛飾もなし。一體、世子は三道集、風曲集、習道書などの著述あり。此談儀書は、晩年六十以後の作にて、最も老熟したる見解なりと知るべし。而して、現行流布の花傳書は如何なる者乎と尋るに、奧書に、或は世阿彌の作といひ、又、音阿彌四座の大夫と相談の上書けりともあれど、埒もなき言說のみ多くて、さら〳〵、申樂談儀と合はず。ことに、この談儀中に引ける花傳書の逸文の、今の花傳書になきこそ奇怪なれ、現行の花傳書は一定僞書なるべし。

次に、本書に田樂と申樂との關係を說くや、各當道としては相異なれど、同一の歌曲舞曲を各自にかなてたりし事を述ぶ。當時、近江本座の田樂に一忠といふものあり、一忠は觀阿より風體の師と推され、觀阿の友なる道阿といふ近江猿樂も、一忠の弟子にて、共に當代に聞えし名人なり。此の比の田樂能と猿樂能との相違は、唯座の相違といふ迄にて、曲の仕振は大同少異にて、共通同一の曲目の上に、各自巧妙を競ひし者と悟らる。また、田樂の他に群樂といふものあり、（群樂の名は已に法隆寺嘉元記、嘉慶元年春日臨時祭記にも見ゆ）さいとう（恐ら

くは細男ならん、春日臨時祭記、宇佐宮放生會記などに見ゆ）と云へる舞曲の事も、此書中に比較して品評せられし節あり。（細男をサイヂウ、又セイナウ政納とも云ふ）又、先祖觀阿の藝風を細かに說き、尙世子の一建立といふことを說き、十體九位を說き、（藝道の品定）世子の一建立は、畢竟、觀阿に異ならずとあり、是れ惟ふに世子の謙辭にて、功を先祖に歸したるならん。

次に定法を說くとて、舞の上、謠の上にも確と定まれる法あるを說けり。而も、現行の花傳書程の煩瑣の點はなし。尙、その定れる法の上に立ちて、かゝり（風情の意）、即面白しといふ程の實例を示し、更に心根と云ふ點を說きて、「よろづの猿樂物眞似は心根なるべし、之を思ひわけてのうへの風情かゝりなり」との解釋を與へたり、是れ蓋、世子が藝術の精神を發揮するの言句也。

音聲上の呂律四聲五音などのことをも說けど、皆常套に過ぎざるが、『觀世常道の猿樂は小歌かゝりなり』との語あり、玩味すべし。此小歌とは當時の俗曲なり、觀世は專之より猿樂の謠振の基礎材料を取れりと見ゆ。又、曲舞道にも因りたれど、和げて之を取りたりと云ひ、近江群樂の中のものも採りたれど、節を附け直せりとあり。又、音曲の發端に一聲定法なりとありて、此一聲は早歌なりとも載せたり。又、平家節に採りたる所もありとの實例を擧げ、總じて能の性根は音曲なりとも結論してあり。

曲舞と小歌との異同につきて、『曲舞は立ちて舞ふ故に拍子が本なり、曲舞は次第にて舞ひはじめて、次第にて終る』とあり。又、『曲舞には定法二段あるべし、次第は次第々々にのぼる故に、上り節とも云ふべし』と說けり。

又、道阿の猛たる音曲の稱美せられし事をいへり。

尙又、文字訛、拍子のつめ開きにも說き及ぼし、末には能の作（書き樣）に就ても說くところあり。さて、新作については、三道集に委しとあれど、三道集今傳らず、まことに惜むべし。されど、談儀中にいへる說「祝言の謠は、直なる體に書くべし、弓八幡の如し、此弓八幡は當御代の初めの爲めに書けり、相生（高砂）は側へ觸れて尾鰭あれど、弓八幡秘事も何もなし」云々。此に當御代とあるは、正に普廣院將軍義敎にあたり、即以て、本書談儀の嘉吉以前に成れるを證す。又、實盛、通盛、放生會、松風村雨などの自作自讃を云へる所もあるが、要するに、世子が日本文學史に特筆せらるべき作家たるの證跡は、十分明白也。先祖觀阿彌の作としては、小町、自然居士、四位少將（通小町）を擧げ、百萬、山姥などは世阿彌の作、佐野船橋は、群樂に材を取りて世子が改作したる也とありて、俗傳に異なる所多し。其他、棧敷、幕屋、橋、猿樂根本の舞といふべき翁及びドラウキャウ、裝束、脇、連のことなどは所々に見ゆ。狂言師は當時槌といふが名家なりしなり。面の事も一段ばかり見ゆ。尙、末に、京（觀世座入京以後を云ふ）と田舍との風體の區別のことをも說ける文中に、十二五郎康次（脇師）の正長元年の手紙見ゆ、是れ亦此書の信據すべき一證にて、滿濟准后日記に確と符合する所なり。

今、歷史事實の方面より、此談儀と俗說との相違を云はんに、本書が猿樂の傳統に付ての說に曰く、『大和猿樂は秦河勝より直に傳る、竹田の座とあいの座あり、竹田は根本重代にして、あいの座は先は山田猿樂なり』云々。

又、伊賀服部某、山田大夫に養はれ、此人更に落胤腹の子を養嗣とす、山田小美濃大夫と云ふ者是れとぞ。さて、此山田あいの座に就きて愚案あり、大和の多武峰の下、櫻井驛近邊に山田村あり、安部村あり、あいの座は蓋阿部村に起り、山田大夫も山田村なればならん。櫻井驛は、上古伎樂師味摩之の徒の樂部の置かれし地なれば、由來もある歟、尙細考を要す。其他、近江、丹波、河內の田樂、猿樂の諸座につきての說明、いつれも緊切なり。

續群書類從中の、天正頃の近江猿樂師なる大森彥助の書けりといふ猿樂聞書によれば、竹田座金春の家より近江猿樂分れたりとありて「金春の祖は秦の氏安、子息合三人ある中の、長兄は世を早うし、次男の金春を春日に、三男の滿太郎を日吉に奉りて、各神廟に仕へしむ」とあれど、此書に合はず。又「觀世、寶生は、稚兒の名也、觀世は兄にして、弟は寶生なり」とあり、是れも正しく誤なり。彼の庭訓往來古抄や、猿樂四座系圖も大同少異にて、上說に同じ。今、談儀によるに、山田小美濃大夫に三子あり、寶生、生一、觀世といふ順也。なるほど、生一といふ觀世流の一名家は、今も細々ながら大阪に存在するを見るべし。此事につき、觀氏家譜（淺野橘園の書ける物）に「大德寺靈會錄、觀阿彌を觀世生一とあるは怪し」とあるにも合考すべし、混同して仲季の二人を一にせるものならむ。相國寺の宜竹和尙が書ける永正年中觀世信光の贊に、信光より五代以前の觀阿をば、漫然服部某第三子と爲し、寶生、生一の二長兄を抹殺して、夭死無名のものと爲したるを見れば、近世觀世の家系の僞

安は、由來久しく且深し。

又、本書中に「今熊野の猿樂の時、鹿苑院初めて御成、清次(觀阿)出仕、第一番に翁を舞ふ、因りて大和座之を本とす」と說き、その紀念すべきことを示し、「世子の十二歲の時也」と明記す。而も、惜むべし、其の年立明白ならず。抑、觀阿の時代世壽につき、普通の系圖と予の私案に二十年の差異あり。世子も嘉吉の亂前後に歿せる者と推斷せられ、とにかく將軍義敎の世盛に、世子は已に六十歲なれば、亦俗傳と合はず。本書に又「觀阿彌は還俗の後に早世」とあれば、常樂記に至德元年五月十九日駿河國にて死すとあるは宰として動かず。押小路內府の後愚昧記、義堂の空華集など合考するに、世阿彌、兒にて藤若丸といひし頃、永和三四年が即十二歲頃ならん、さすれば、觀阿彌の早世は四十歲未滿なるべし。之を以て、俗說に「觀阿彌は應永十三年五月十五日五十二にて死し、世阿彌は康正元年八十二にて歿す」とあると對照すれば、大にくるふわけなり。

之を要するに、本書は、史料として、因りて以て、五百年前猿樂能の成立當時の形情を盡し得るのみならず、之を藝術の上より、古今歌舞の比較を爲すの材料に備へたらんには、更に幾多の發明あらんこと必せり。予は、之を一般能樂にたつさはる人士に進むるのみならず、廣く歷史家文學家藝術家にも問ひ、殊に世子が文學史上の位置を、本書に因りて定められんことを希求するものなり。(以上參考)

遊樂ゆうかくの道は一切物眞似ものまねなり也といへ共、申樂神樂さるがくとはかくらなれば、舞歌曲ふか二きよくをもつて本風と申ぬべし、さて、さるかくのまひとは、いつれとりたて立申べきならば、此道のこん根本なるがゆへに故、をきなの舞と申へきか、又うたひのこんぽんを申さば、おきなのかくらうた神座歌と申へきか、こゝろさしをのふるを志述うたといふと、ふるくもいへり、是萬曲のみなもと古源成へし、然れば、舞歌ふか二曲をなさゝらんものをは、うるはしきしんとは眞爭いかて申へき、三道藝云、上くはのくらゐは果位、舞歌幽玄ふかゆうけい、本風として、三體さうをうたるへし、上代末代にけい人の相應ゆう〳〵さま〳〵なりといへ共、至上長久の、天下に名をうるしんにをきては眞於得幽玄ふけんの花風離をはなるへからず、くんたいさいとうのけい人は、一たん名をうるといへ共、世上にたへたる且勝藝男?細樂?くんたいさいとうのけい人は、一たん名をうるといへ共、世上にたへたる且勝藝男?細樂?名文なしと、云々、又、花傳云、和州、江州、田樂に風體かはれり、然共、しんしつのしやう眞實上手執漏すはいつれの風なり共、もれたる所有まし、只、人一からの風斗をえて、十體にわたる所をしらて向得渉知忌?嫌?よみきらう、風體きやうきはめん〳〵かつかう〳〵なれ共、おも白しと見る花は、和州江州田經?藝?面恰好樂かくにもれぬ所也と、殊に此けいとは、衆人あいきやうを以て、一ざこんりうのおゆふくなれ漏藝愛敬座起立

ば、ときにしたがひ所によりてをろかなるまなこにも、けにもとおもふやうにせんこと、しゆふく也、と云々、先、本風より次第〳〵にうつるへし、そうして、鬼といふことをはつゐにならはず、二曲三體のこうへて、かいらうをへて、其おもかけ〳〵を、いまする也、名をえしよりこのかたとても、くるひ能をはせさりし、と也、

一忠、清次法名觀阿犬王法名道阿龜阿、是たう道の先祖といふへし、彼一忠を、觀阿はわか風體の師也と申されける也、道阿又一忠か弟子也、一忠をは世子はみす、京極の道與、海老名えびなの南阿彌陀佛ふつなと物語せられしにてすいりやうす、おやくめいたるして也、田樂能のゆへ也、田樂の風體、はたらきはたらき、音曲は音曲とする也、ならひてかく〳〵とうたふ也、いりかはりてはつゝみをも「や、てい〳〵」と打て、とうはうかへりなとにて、ちやく〳〵として、さと入也、ろくをんゐん鹿苑院將軍家「高法師マツヤは、へたなれとも田樂也」と、おほせられける也、喜阿、音曲の先祖也、日吉のうしくまか音曲をにすると申ける也、音曲能斗せし也、おづや入あかはりたる風體とす、彼喜阿、五位の聲風まなかの位也、九位にはくうしんくは風にのぼりたるもの也、妙の位はそうしてえいはぬ座也、上くはにのぼりたらは妙は有へき歟、世子十二の年、南都ほうをんゐんにてしやうぞくたはりの能有と聞きて、まかりて、いか成ことをきかんすらむと思しに、喜阿せうに成て、をのつけかみに、ひためんにて「むかしはけいらくのはなやか成し身なれ共」の一うたひ、やうもなく、ますくに、かく〳〵とうたひし、よくよくあんしほとけは、後は猶おもしろかりし也、すみやきの能に、をのつけかみ、いたゝきにおりかへしてゆつく、今ぞう阿きるせうのめんを、一色にさいすき、ねりぬきに水衣、たまたすきあけ、たきゝおひ、つえついて、はしなかにてしはふきて「あれなるやま人は、にかるきか、家ちにいそくか、あらしのさむさにとくゆくか、同し山にすまいをなし、かさしの木をきれとこそいふに、とくゆくか、かさなる山の木すゑより」、と一せいにうつりしくせ物也、おとうのものをみるやうなし也、其南都のしやうそくたはりの比より、聲そんしはしむると申也、しつやにいはせて、うと〳〵つけし也、くんせいきとくの所は、むかしの名人の中にもひいてけるもの也、今のそう阿は能も音曲もかんくは風に入へき歟、能かもちたる音曲、音曲もちたる能也、南都とうぼくゐんにて、立あひに、ひんかしのかたより、にしに立まはりて、あふきのさき許にて、そとあひしらいて、ととめしを、かんるいもなかるゝ斗におほゆる、かやうの所見るものなけれは、道も物うゝとかたられし也、然共、しやうくわところは、諸人の目にも見え、耳にもをよふやらん、そう阿が立合は、よのにもかはりたるなど申もの有、しやく八の能に、しやく八一くふきならひて、かく〳〵とうたひ、やうもなくさと入ひらにむをたり、彼そう阿は、打むきたる田樂にてはなし、なにをもする也、ならひゐてうたうてい、すみやきにたきゝおひたる樣は田

樂也、

犬王は、上三くわにて、つゐに中上にたにおちす、中下をしらさりしもの也、音曲は中上斗歟、あをひの上の能に、車にのり、柳うらのきぬに、ゆみくくみくる田うゑの女にんは、まつくるまのなかへにすかり、はしかゝりにて「三のくるまにのりの道、火宅のかとをやいてぬらん、夕顔ゆうかほの宿のやれくるま、やるかたな」と、一せいにてやりかけて、たぶ〳〵といひなかし「うき世はうしの小車の〳〵、めくるや」、なとやうの次第を、「くるま」の「ま」のをはりにて、いふて、いひをさめに、ひたとひやうしふみし也、後のをやうなどにも「山ふしにいのられて、山ふしは」と、にうれしはかへりみづかひ、小袖あつかい、えもいはぬ風體也、天女などをも、さらりさゝと、ひくうの風にしたがふか如くにまひし也、こんていのきやうを、わきのしてにやりて、引てより、まひいたし、也、はしめの段には、ひたりへあふぎとることも、いたくはなかりし也、入はに「なにのなにして」と、かゝるとき、ひたりにとり、大わにおしてまはりなどせし也、なにと舞しやらん、とおぼえける也、かやうなれども、いまやうまらへ道は有、こと皆おもしろしと見て、おびをとける斗をにせて、むすびをさむることを知らず、念佛のさるかくに、ねりぬきを一かさね、おなしまへにきて、すみそめのきぬの衣に、なゐ〳〵たるほうしを、ふか〳〵と引入れてきし、面白かりし也、まくやより申てきたるやうに、人中よりし

やうちうに、一心ふらんに、南無阿みた佛と申て、しやうこをたゝきて、いて、りやう〳〵と二三へん、ひやうしにもかゝらず、打出して、さうの手をあはせ古體にをかみし也、ことはのつまに、南無阿彌陀佛と、一しんふらんに、誠に常のやうに申て、あなたへゆらり、こなたへゆらりと、立ありきてしおも影、今も見るやう也、と云々、もりうたのさるかくに、物にこしかけ、きやうをよむ所へ、さいはゝきたりて、二人いかにと申とき、母のかたつく〳〵としはしみて、かほひく、しりめにて、さいのかたをそと見て、うつふきし、面白き心ね也、と其比さた有しなり、こは子にてなきと云さるかくに、あれとくいねと申とて、目にて心ねをせし、同くさた有し也、あふみのかゝりは、直とまりてあつといはする所をは、つゆ程も心にかけず、たぶ〳〵と、かゝりをのみ本にせし也、後の入はなどには、みな〳〵立てうたひて、さと入也、道阿こそ上くわにて、かゝるかゝりをのつから面白きを、今のあふみは、いたらずして其體をする間、音曲も風體ものひくさりたる也、あふみの風體かくの如し、わきはまよに〳〵成まてなりきも形をはきも〳〵しとせし也、ひたとそうたるわきは、いはまつ、とき〳〵、うしくま、わきはしらとせし也、

先祖觀阿、しつかの舞の能、さかの大念佛の女ものくるひの能なと、ことに名を得し、ゆうけんひしやうの風體也、と花傳にも有、上くわにのほりても山をくつし、中上にのほりても山を

くつし、又下三位にくだりちりにもまじはりしこと、たゝ觀阿一人のみ也、すみよしのさんくうの能なとに、あくせうにたてゑぼしき、かせつゑにすかり、まく打あけいて、はしかゝりにて物いはれし、わきをひよりろんきいひかけ、又「きの有常かむすめとあらはす、ぜうかひかこと」なとしめつくゝめつせられし、更に及びかたし、大男にていられしが、女能なとには、ほそ〳〵となり、じねんこじなとに、くろかみき、かうさになをられし、十二三斗にみゆ「それ一代のけうほう」より、うつり〳〵申されしを、ろくをんゐん、世子に御むかい有て、ちこはこまゝをかのうとおもふ共、こゝはかなふましき、なと御かんのあまり御りこう有し也、なににもなれ、音曲としかへられし事、神變也、又いかれる事には、とをるのをとゝの能に、鬼に成て、をとゝをせむると云能に、ゆうりき〳〵とし大になり、さいとうけふなとには、ほろりとふりほとき〳〵せられし也、くさかりの能に、「このむまは、たゝ今うへしに候へきや」よりたとへひきし「すいゆかす〳〵」なと云くたして、「こゝは忍ふのくさまくら」と、うたひ出し、目つかひし、さと入し體、此道にをきては、あまくたりたるもの也共、及かたく見えし也、其比のわきは十二三郎、助九郎、十二六郎はわかくて、下にてつゞけし也、きやうげんは大つち也、是みな先祖の風體、大かた聞しまゝかきをく所也、彼先祖の風體をあはせて、世子一てんりうの十體に引あはすれは、觀阿一てんりうの上に猶もれたる事あるへからず、靜成し夜、き

ぬたの能のふしをきゝしに、かやうの能のあちはひは、すゑの世に知人有ましけれは、かきをくものくさきよし、物語せられし也、然れば、むしやうむみのみなる所は、あちはふへき事ならず、又かきのせんとすれ共、更に其言葉なし、位のほしはしせんにさとるへき事、とうけ玉はれは、聞かきにも及はず、たゝうき船、松風むら雨、なとやうの能に、さうをうたらんを、むしやうの物としるへしと、云々、そう阿、世子の能を批判して云「有かたや和光守護の日の光、ゆたかに照らすあめか下」なと、たふやかに云なかす所は犬王、ありとをしの、はしめよりおはりまて喜阿、かひつくろひ〳〵、くせまひはたらきは觀阿也」と云々、「ありとをしとも、おもふへきかは、とは、あらおもしろの御うたや」なと、「是六道のちまたに、さためをいて、六の色を見する也」なとやう成所、「なにとなく、宮守なんとは、しんやのかねのこゑごとうの光」なと、「よことともし火もなく、すゝしめのこゑも聞えす」、かやうの所、皆喜阿かゝり也、「神はきねかならはし」なと、かくといひし也、「宮もりひとりも」のやう成「ひ」もじ、つまりて「ひつ」といひし也、「松の木はしらに竹のかき、夜さむさこそとおもへ共」、みなかのかゝり也、うかひのはしめの音曲は、殊に觀阿の音曲をうつす、くちひるにてかる〳〵といふこと、彼かゝり也、此能はしめよりをはりまて、皆たけたる音曲也、「おもしろの有樣や」より、と、此一うたひ斗同音也、後、微の鬼も、觀阿とをるのをとゝの能の後の鬼をうつす也、彼鬼のむきは、

むかしのひまの四郎の鬼也、觀阿もかれをまなふと申されける也、さうりき〳〵と、おふやう〳〵と、ゆらめいたる體也、みつ太郎の鬼は、つゐにみす、ふるき人の物語の樣、うせていてき、こまかにはたらきける也、たららの能をかきて、觀阿わきに成て、世子せられしに、うせていてきたる風せいをせしを、みつ太郎かおもかけ有とかれられける也、彼たららの世子のくるいのうまねかたのはしめ也、

一、定れることを知べし、立合はいくたりもあれ、一ミなるべし、さてこそ立合にて有へけれ、さて、してのひとりもむ所有「とらうきやうもろ共に」、なといふ所は、してのひとりもむ所也、三ともむ所あり、三度めなどには、あふきをひろげて、右にもちて、手をひろげて、さきへやといひて、ふみよりて、りやうの袖を打こみて、左右へさつ〳〵とすつる也、是一の手なり、ひかし有し也、くせ舞のしよにもむ所有、ながめて云くだすとき、ゑひ〳〵ともむ也、しよをはしよと舞、せめとはせめと、せめつ、くゝめつすること、定まれる也、「けんしゆ共にけすとかや、せきくわつ地ごくの」と云所をは、きつとひきく成て、小あしにひらう所也、さやうに、せめてはのべ〳〵「くわさうあならをやく」など云所にては、はや手もつき、いかんともせられぬ所にては、うしろへなど、へりもなくふんてしさり、きり〳〵とまはりてなどして「うへてはてんくわんをのみ」などいふ所を待うけて、よろこふて、扇をひたりへ取て、うつひらきて、おしてまはりなどする、かやうに道をまもりえて、すべきしさい〳〵有を、たゝおもしろしと斗見て、いまだ手もつきぬに、くるり〳〵と、まはり〳〵などする、あさましき事也、うちにて舞をまふにも、あひかまへて、じよはきうと知るべし、じよよりうたひいだしたらばじよよりまふべし、きうよりまへとあらば、きうの手を舞ふべし、其ときじよの手をまはゝ、わろかるべし、亂酒のときにいりて、能などのあらんときの能、きにんのきけんをうかゝふべきこと、又かくの如し、又ふたりつることに、ちこなどまひたるうへに、舞こと二重に成事、心えべし、むけにをとなけなくみゆ、はしめの舞をじよにして、はのすゑをちと心ねに見せてきうをそと舞て入べし、又あふぎおとしの手とて、そふ阿せしは、あふきをおとして、さうのかりきぬの袖のつまを取て、手に結て取し也、だう阿も其ときけん物す、世子一りうはかくはなし、定まるましき也、口傳有へし、ひさかへりくるりとまはると、はうのうちにはすべし、はうのほかにはすべからず、たんご物狂のかんこ取に、地にあるものなれば、ひさをつきて取てかへる、こゝにてはにあふべし、

一、はんしかゝり也、かゝりもなきやうの風せいも、又其かゝりにてをもしろし、かゝりたにはよければわろきことはさして見えず、うつくしければ、手のたらぬもくるしからずや、わろくて手のこまか成は、なか〳〵わろく見ゆる也、舞に目そとゆかむ、をも白き所有、ひたりへは

さみのみはゆかむまし、右へはめそとゆかむべし、五七〳〵の句毎に、見はたらきをすべし、
松風村さめの能に「わかあとをとひてたひ玉へ」の所より「さらは風せいのよへし、わかあとゝ
ひて」迄は、かゝへてもちて、「いとま申て」と云所より「よりてかへる」と云所、かへればをもし
ろき也、「松風斗やのこるらん」に「のこる」から歸るほとに、面白もなき也、「らん」からかへるべ
し、殊にかやうの所、心ね風せい相應なくば、面白も有べからず、をはすての能に「月にみゆ
るもはつかしや」、此とき、路中にきんをひろふすかた有、さるかくはゑんけんを本にして、ゆ
るやかに、たふ〳〵と有へし、然るを「月に見ゆるもはつかしや」とて、むかへる人にあふきを
かさして、月をはすこしも目にかけず、かいかゝみたる體に有ゆへに、みくるしき也、月に見
ゆる、もと也、あふきをたかくあげて、月を本にし、人をば少し目にかけて、をほ〳〵としを
さめたらば、面白風成べし、かやうの能に「いつかさて、たつぬる人を」など、かる〳〵はや
〳〵とうたふべし、ことにかやうの所、をそくてはかゝりのぶべし、たんご物くるい「おもふこ
と〳〵、なくてや見ましよさの海の」、かやうの所、音きよくがゆう〳〵と有て、音曲にて風せ
いをする所也、其をはやくいふによりて、してのふせいもなし、いかにもかゝりたる音曲成べ
し、うこんの馬はの能「まつことあれや、有明の」、かやうの所、次第〳〵によすべし、おしか
けたるまては又なし、戀のおもにの能に「おもひのけふりの立わかれ」は、しづかに渡るひやう

しのかゝり成べし、此のうは、色あるさくらに、柳の亂れたるやうにすべし、船はしなどはせ
めてせめて、ふるまうたる松の、風になひきたるやうにすべし、鬼は、まことのめいとの鬼を
見る人なければ、たゞ面白かかんよう也、げんさいの事、いと大事也、
一、よろつの物まねは、心ねなる可し、先その心ね〳〵をおもひわかちての上の風せいかゝり
也、人の心も、きをつめて見るときも有べし、たゞあら面白やと見る時も有べし、きをつめて、
あはとむるよ〳〵と、まんざおもふけしきあらば、そととむべし、大かた面白しと、ゆう〳〵
とおぼゆるけしきあらば、きときをもちて、きととむべし、たうさの人のきにたかへてとむれ
ば面白、これ人の心をはかす也、されば、これをば殊にひして、みん人には知らすましき也、又
今ほど、はかすといふこと「やう〳〵はけあらはれて」と、など云、それ、こなたが目のきか
ぬ也、ちごの名殘にて、ひ若ときを見もせぬ也、はかすとは、じやうすの、わろきとは心えなか
ら、年などのよりて、世子出家以後、うちにて舞を、ちとはかすにそ。はかすにてあれ、へたのは
けのあらはるゝといふこと、たゞ目かきかぬ也、うきふねの能「この浮船ぞ、よるへしられぬ」
と云所かんよう也、そこをば、一日二日にもしはつるやうに、ねぢつめてをさむべし、常もり
の能に、此女おもひいれてすべきを、皆淺くする也、人のうたふまて、うつふき入て、其うち
よりくときいたすべし、そうして、女の能、かゝりうつことに、ときときそとかほなど見あ

げたるべし、すみだ河の能に、うちにてこもなくて、殊更面白かるべし、此能はあらはれたる子にてはなし、まうしや也、ことさら其本意をたよりにてすべしと、世子申されけるに、元雅は、えすましきよしを申さる、かやうのことは、して見てよきにつくべし、せずばぜんあく定かたし、四位のせうしやうの能、ことおほき能也、いぬわうは、えすましき也と申ける也、一むきに成共せば、やまとのはやしにてすべき、と申けるとかや「月はまつらん、月をはまつらん、われをば」の所、一こんりうしやうしゆの所也、がやうの能に「又こそ、君のかたみなれ、あらおぼつかなの御ゆくへやな、よぶことり」とくるひ出して「あまりに久くるひて、さそはれし」と一せいになす、わろし、よぶことりと云心ねを、いまだけん物しゆにもたせて、其にほひを、すこし風せいにこめて「さそはれし」と、一せいにうつるべし、たんご物くるひに「花のものいふは」のほろほろのひやうしちやうとふむ、ひやうしを色とりてふむ也、「はなのものいふは」といひつつくる心ねにて、つくるうちに、いつくよりもしらずちやうとふむを、今ほと、若もの、ひやうしを本にいひきりてふむ也、をかしき事也、四位のせうしやうに「涙の雨か」ちやうとふむ、をなし事也、はやくてもわろく、遲くてもわろし、佐野の船はしに「よひ〳〵」にちやうとふむ、をなし、いと大事のひやうし也、「柳はみとり、花はくれない」のひやうし、ほんは「花は」の時、二ふむべし、「みとり」の「り」の外、一ふみくわふれば、おも白きかゝり也、是はわら

かや鬼の能、ことさら當りうにかはれり、ひやうしもをなしものを、よそにはは らりとふむを、ほろりとふみ、そよにはどうとふむを、とうとふむ、さいとうふうき是也、ひやうしにつきて、あちはうべきこと也、又かはらのくわんしんさしきくつれのとき、本さの一忠、新座の花夜叉、かれこれ四人つゝ、八人にて戀の立合をせしに、「うらみはすゑもとをらねば」とあげて、いひをさむるこゑつまりければ、一忠しはふきをして、あふきのかなめ取直し、あせをのこひけるに、花やしや「すゑもとをらねば」と、ふとときりにいひをさめて、はらはれけり、一忠、はなやしやにはちをあたへけりと、たうさ申き、又、ゑなみと、世子ろくをんゐんの御前にて立合せし時、おきなも「そよや」といひて、そとゝめけるに、ゑなみいまだ舞ければ、わらひけるも、其時、觀世ゑなみにはちをあたへんとて、かくのごとくにするとたうさ申き、じやうすのいちかくの如し、更に人をわろしめんが爲にあらず、又、はしかゝりかゝへてもつて、あはまうよ〳〵と、衆人にみすべし、まふべからず、後にくもつまりてわろし、そう阿かするもさしてうけず、能にしやうじゆせぬして有、なくといふことに、袖を目にあてゝやがてひく、あるいは、かた目などのこう樣也、そりかへり、こしとひざとにてかへる也、はりたるゆみのそりふかきをはづすやう成べし、ときのまにちらりとかへるべし、かへるとき、うしろに、つゆほども、みか有てはわろかるへし、たかくかへりてひき〳〵をさむべし、舞とむるときの扇は、

ひろげたるつまにて、袖のくちをうけて、じつととむる也、又舞を見ぬ舞有、まひを見るとは、わかまふ時のゆびのさきなどを、めをやる也、くびせすぢなどをも、ねそますやうにもちて、かたとくびとのあひた、とをくなすやうにして、手さきをあくべし、手をはやくひらく時は、ねちつけてをさむ、手をねちてやるときは、をさむる手を、はやくをさむべし、身を常よりもはやくうこかさねば、ねちつけてとゝむべし、身をつねよりもおそくしつ〳〵とうこかさは、ちやとはやくとゝむべし、(こゝのたんは、をさなくて聞し間、能もおぼえず)又、にせたる能とは、さらとする能也、人の能をにせうとする斗にてはなし、舞のなく見ゆるは面白もなきゆへ也、あはれをもしろからんするゝと見る所に、をも白もなくてとをるゆへにながき也、うちの舞のとき、かみしも引つくろふことは、えしやくにて、つとたゝんことの、こばくすけなきを色とる體なるを、是をにするほとに、あまりにて目につく也、

一、とつと云位、しよ入もんにも入へからす、たとへは、きやうへのぼるもの、とうしを見て、あつといひたる程也、又、をも白き位は上也、物をことゝくしたるはして也、しての上に能するは、はや上す也、上すのうへにをも白所也、然れば、をも白位にすべき事にあらず、名筆のさらにかき捨たるものにせは成へからず、しんよりこうをへて後じさい成所也、能にむくやきといふはゆう也、はなたにあらは、むきやき迄も入ましき也、むくやきなきと云は、まつは、

毛吹疵

けをふきてきすを求たる也、

一、こゑの事、とき〳〵「や」といふこゑの有を、人にせて云也、にすべきことならば「や」こゑにてはあるましき也、近頃、やはた放生會の能に「あき來ぬと、や」と云しを、殊皆ときのけふにもてはやされし、じせつによりておぼえず「や」と云こゑ也、「やう〳〵」と云こゑといふ、そのの有のをたる心えよりいづ、能さがらんとて、かかる心えてくる也、近頃、此こゑちきにさがりたる者共有、

一、音曲のこと、音曲とは能のしやうね也、されはかんよう又此道也、音曲の上古と申さんは、五音四しやうより、りつりよさうをうたるべし、五音相通のとは、たゝならひ成ば、しるべき事のみならずといへ共、先有へき分さいは、しゆがくして、しゆうげんをば、いづれの調子こゑをもつていひ、かなしみをはいつれのこゑにていふと、道を分てしらずは有へからず、けいこの次第と云は、先わがこゑの正體を分別しての上のこと也、さて正路にもとつくべし、すく成かゝりは祝言也、是をぢたいとしてゆうけんのかゝり、れんぼのかゝりあいしやうむ常音など、其かゝり〳〵、うもん無文の心ねつきて、たけたる位にものぼるべし、一返に心をやりて、よをさらふべからざること、能の十體に渡ることゝしるべきが如し、たゞ音曲はうつくしくきんにかなへるが上くわ也、又、くせ舞小うたの差別有事を心得べし、さるかくはこうたかゝり

のみにて、くせ舞はかくべつ也、然共、觀阿白ひげのくせ舞をうたひしより、いづれをもうたふ也、然共たゝあけさけ斗にて、うちなりたるくせ舞だうの音曲にてはなし、かれをやはらげたる也、されば、くせまひはくせ舞とうたひ、こうたにもしな〳〵の體有ことをわけて、又、あふみぐんかくにもちゝとかはれるとを心え、能をもかきふしをもつくべし、いたり〳〵て、能曲の一つにきする所、萬德の妙くわとひらく成就なるべし、

一、しゆうけんはりよのこゑにてうたひ出へし、ふかきならひあるべし、まさしく其座敷にてのときの調子は有もの也、此座敷にてはいか程成るべきがよかるべきと、かんかへ見へし、先心をよくそれになせは、一日二日けいこをしたる程にむかふ也、能々しんをしつめ、調子をねとりてうたひ出べし、祝言はすぐにたゝしくて、面白き曲は有へからず、九位にとらば正花風成べし、喜阿か云出しける也、わきの能、祝言に有ましきふし也、女かゝりにはあふべきか、音曲の風體品々ほん所あれは聞かきにをよばず、うちにての音曲に、ほつたては一せい也、定れると也、近比、古體とてあまねくは申されず、後の「いはほをかさゝれ石」の一せい也、あけでやる所をはのふるといひ、なかす所をはなかむると云也、「まつ」と「もつ」とたいはんをなしかるべし、ゆりは十也、六四也、甲のものなれども乙とつくること有、こゑに四重有ときは、三重を乙とつくる也、早歌に有、猶々かくのとくのはうやう、口傳有べし、安全音と云と、祝

言のみとはおもふべからず、たけたる位にのぼりて後は、ゆうけん、れんぼ、哀しやう、何もしさい成は、安全成べし、此内、れんぼかゝり、面白も又大事也、たけたるかゝりは、又猶上也、大せいなみゐてうたふこと、皆しやうず也共、大せいなきやうそろうるべし、又とらうきやうの立合、むかしよりの立合也、おきなのとはのやうにてつたはりきたるものなれば、たやすくかきあらたむべきにあらず、

一、くせ舞とこうたのかはり目、くせ舞は立てまふゆへに、ひやうしか本也、くせ舞には、わうしゆと分けてうたふと心得べし、たゝうたひはふしを本にす、あひをんとうたふと先心得て、ふしをもつくべし、しげひらに「こゝそゑんぶのならさかに」、此「こゝそゑんぶのならさかに」のふし、くせまひには有ましきふし也、おふくぶし也、曲舞ならは、をくりてひんなまらするやう成へし、西國くだりの曲舞に「あしの葉分の月の影、かくれてすめるこやの池」「かくれて」と、句をもつ心ねにうたひしを、南阿、曲舞ふしならば、なほひんなまらかせ、と申されける程に、それより今のふし也、よろほしのくせ舞、そこしやうねはくせ舞也、くせ舞は次第にて舞そめて、次第にてとむる也二段有べし、後の段はよすべし「かうの物、なにのなににて有ければ、かんのことのいかいかの」と、二斗ないし三斗も、をなじかゝりにいひて、さて「かかんのことの」とくる也、たゞ「かうのもの」一にて、やかてくるはわろき也、後のだんのすゑ、

「かうのもの」にならんにて、まへに有のぼりふし也、「とく〳〵とさそはれて、身をうきくさの根絶ねをたえて」なんと云所也、「有難も此寺にげんし玉へり、有ときはせうねつ、大せうねつのほのほにむせび、有ときは」など云所也、眞實ののぼりふしにては有まし、さりながら、次第〳〵にのほればのぼりふし也、是皆くせまひをやはらげたる也、西國くだりの曲舞を、道の物とりて舞し也、其ときは「かくれてすめる」とをくりける也、西國くだり、をも白曲舞也「ふくろうせうけいのえだになき」なと面白所也、觀阿ふしのじやうす也、をとつるかゝり也、南阿みだ佛ふしのじやうす也、喜阿は曲舞はまはさりし也、こうたのかゝりのみ也、とうあくくだりの曲舞「ほうらいきうは名のみして、けいりくにちかき」此だん名譽の所也「南無や三島の明神」より面白き所也、ふしは南阿みだ佛つく、西國くだりは觀阿ふしをつく、皆作者はたまりつ也、ろくをんゐんの御意に違ひて、東國にくだりて、程へて此曲舞をかきて、世子ふち若と申けるとき、うたはせられけるに、將軍家、作者を御たつね有て、めしいたされける也、西國くだりは、後かゝれける也、ゆらのみなとの曲舞、やまふは、ひやくまん、是らはみな名よの曲舞共也、

一、たゞかゝり也、むかしのやまと音曲は、さしてかかりなければ、もしなまりよく聞ゆ、かゝりだによければ、なまりはかくるゝ也「かやうに、あた成夢の世に、われらもつゐに殘し、

何一ときをくねる蹠」いづれもなまりたれ共、かゝりありてなまりかくるゝ也、南阿彌陀佛日本一の音曲といはれしうたひ也、喜阿かふし也、たゞ阿「やう〳〵はかなや」など「さらばしやくそんの出世には生せざる蹠、つたなきわれらがくわほうかなや」是を、いづれもきたなき音曲なれ共、かゝり面白あれば、たうよも日本一とほめられし也、たゞ阿うたひとつけしもの也、たけたるかゝりの有は、音曲たけ有て聞ゆる也、「らう人こたへ申やう、われは手なつち、あしなつち、むすめをいなた姫と云ものにて候也、ちゝのらうおう手なつちは、げんたゆうのしんとあらはれ、東海道のりよ人をまもらんとちかひ給り」ちともおちず、くわ〳〵といひたる、たけ有ておほゆと也、なにの何とくつて、ほろりとおとす、南阿みだ佛のふし也「かはたけのながれの女と成、さきのよのむくゐまて、おもひやることそかなしけれ」へい家ふし也「ねひ觀音力、たうしんだん〳〵」の所、ふしも、ことはも、ひやうしもさうおうたり、音曲はれんぼかゝり、花か有也、ふしと云はたけなとにも有やうに、先わるきことをもいふかゝりか本也、つんときつて、引のへうとてつゞる、皆かゝり也、さて、かゝりは何そと、立かへりてみれば、

ゆうよほうのときの事也、

一、もじなまり、ふしなまり、何「の」と云てにはの字のなまりたるかふしなまり也、もしのなまりたるもしなまり、もんしもてにはの字もをなしとなれ共、心得分べし、「松には風の音は山」

此「松には風の」ふしなまりたるよし申せと、「秋の野風にさそはれて」此「野風」同やう也、よき
ふしなまりは面白、させるかんなきに、ふしなまりををくべからず、うたにも、やまひにをか
されぬうたはくるしからず共いへり「小野の小町は」の「は」こはきもじ也、いひすつべし「人
の宿をばかさばこそ」いひかけておとす、わろし、さやうのともあれば、こゝにてわろし、「か
さは」の「は」よりさぐべし、夏の祝言に「うけつく國」「つく」とあたるわろし、すぐに言べし、
「みかさのもり」の「の」もじすぐ成べし「一念彌陀佛」の「念」すぐにいへはこはし、かやうのと
きは「ねん」と、ひやうしやうのかゝり成べし、是はふし也、とりわき「神風やはしめたてまつ
り」「たて」とあたるわろし、すぐに云べし、「めぐみひさしく」となればわろし、「われとも、
きみをいはひて」「はひて」とはるべからず、「ゆふへの風にさそはれ」「ゆふへ」の「へ」を下べし、
「らうおういまだ」「いまだ」をすぐに云べし、「けにや、皆人は六ぢんのきやうにまよひ」「皆人は
六ぢん」ときうに「わ」をいひすてゝ、すぐにうつるべし、「六ぢん」下よりいふ、わろき也、「光げ
んじと名をよばる」此「と」もじりつにてつくべしをなじ、「よん」にてはつくべからず、南あみだ
佛をも白しといはれしふし也、くわんとうあやまつてなまらかすこと有まし、喜阿、音曲の上
すにて、ときゝ申まねをはすべからず「きんみつと申もの也」「物也」と云はなつべし、
一、ひやうしのつめひらきは、たとへば一けん二けん三けんと、其まゝ定れるがごとし、其

うちにもじのたらぬをばのべ、もじのあまるをはよする也、猶々ふかき口傳あるべし、「旅人の
道さまたげにつゞけものは、いくたの小野の若なも、よしなやなにをとひ玉ふ」「よしなや何を、
とひ玉ふ」とつゞくるがわろき也、「よしなや」と云きりて「なにを」といふべし、よしなや」をば
よすべし、「げに心なきあまなれ共、所からとてをも白さよ」「をも」をもちて「しろ」をひろふべ
し、「時しらぬ山とよみしも」かやうの「山」云所よする也、いづれにも渡るべし、かやうの所にて
音曲のふる也、富士ふじの能也、「をそろしや」と云所、りやうをかけて、ちうにいふ所を、今程なが
ひるわろし、是よりかゝりをたいにして、ひつたと音曲にかゝるべし、とものものくるひに「こ
ゝはふしにかかるまじ、いはれさせ」「させ」ときうにきるべし、「人間ふれいの花さかり、無常
のあらし音そひ」の「無常の」とうつる所、ゆう〳〵としてものふべし、りやうけん大事也、無
常の「し」をぬすみて「しやうの」といふもじのさきをきるべし、「せきばくたるしんこく」はるべ
し、八幡に「七日七夜」の所「百わうばんせい」の所、よせられし也、いひくだすてにはの字を、
下の句のもじかしらにをくことも有「かのせうくんのまゆすみは、みどりの色ににほひしも、
春やくるらんいとやなきの」「の」もじ「柳」にてきりて「の、おもひ亂るゝ」といふべし、うかひ
の能に「真によの月や出ぬらん〳〵」、今の御所、むばゞのうのとき、したにはやくいひて、
ま中のつぼに入ざりし也、「月や」からきつ〳〵とひやうしにてもつて「いぬらん」と云て、ゆくあ

しをちうにもつて、とうとふむ所也、かやうの所、したのひやうし也、其能いれくみのざかを
にてせしゆへ也、ひやうし大せつのこと、たいもつのとき「見ゆ、ゑひ」といふひやうしにて、
衆人の心一りきにておしてゆく、是ひやうしのたいせつ也、
一、心ねをしるなとは、出いき入いきを、地たいとしてこゑをたすけ、曲を色とりてふぞうふ
げんの曲有、其地に安位する所なりと、風曲集にも、有飯尾の善右衛門とて、けんのくしにて、
早歌うたひにて有りしが、じやうす也、しかとも、くしゑらびの中へは入らず、いか成かはり
めや覽とたつねければ、をなじくしの物語とて、世子かたられしは「津の國の」といひおさむる
やうの所の曲、「津」の「の」と「國」の「の」とのあひたに、いきを引やうに云、引やうに聞えばわ
ろかるべし、聞えぬうちを、上すは聞也、「國の」「に」と「の」とのあひたにもいきを引、是にて
心得べし、かやうの所いたらて、ゑらびにもる、たゞ一切じよはきうをしるべし、もし一字に
しよはきう有べし、人の物いふ「返事を」と、やがていふは、じよはきうなし、こゑいたさぬさ
きじよ也、「いやよ」と云所は也、いひはつる所きう也、じよはきうなくは、とゞくべからず、わ
うのこゑをじゆにうたふとは、せめてやすくやあらん、じゆのこゑをわうにうたふべきと、い
かゞとたつねければ、じゆのこゑをわうのこゑかゝりにうたひ成事は、調子をひきくとして
うたふべし、わうじゆの二のかはり目も、わかこゑのかはるときを心えていひ渡すべし、なと

へば、かまくらこゑのとによつてしやうちきに成ときの有がことし、音曲をばりよりつくとう
たふべし「あひみはやとおもひて、はてし所をたつぬれば、うたかたの」「うたかた」をばりつ
にていひ出すべし、かやうの所をなし、りよのこわたしならば、わろかるべし、又、うつくし
くうたふ斗にて、とめて、きつとなき也、きつときにてとゞむればきう有也、「よししからずば」
は「は」にてとゞまる也、ひやうしおこし、たふくといふを、人おもしろしと斗見ていふ程に、
ひやうしのびてゆく也、水鳥のやうに、したをはかせきて、ひやしをもつてうつを、うつくし
くいふを、いたらずしてにする也、「とかや」と「と」を引て、之をうら山しがりて「とうかや」な
どひきする也、常もりの能に、物語、べんけいなどのいふとには、かはるべし、なき女とう
となれば、ほろりと云て、さるから、けなけに有べき所に、まなこをつけていふべし、ふるの
能に「ふる野にたてる、みわのかみ杉、とよみしも、其しるし」といふ所「ふるのにたてる、
三輪の神」まて大事にいひて、「其しるしみえて」と、やすくかるくとうたふべし、はんぢ
よに「せめて、ねやもる月だにも、しばし枕に殘らずして、又ひとりねと成ぬるぞや」大事の
そこしやうね有、「成ぬるぞや」面白かゝり也、何もをなし事なれ共、此くせ舞、いづくもそこし
やうねゆるかせなるべからず「そなたのそらよと」の「よ」をは、をさなくちやとつくへし、「わが
まつ人よりのをとつれ」の「を」もじ又すむへし、「よしやおもへは」「も」をもつへし、「はんぢよか

ねや」とうつる所、ふかくも淺くもわろかるへし、うこんのはの能に「はなくるま」「ま」に
てなかむる、「ま」大事の字也、松風に「あまの家、里はなれ成かよひち」の「あまの家」をおもく
「かよひちの」をかるくいふへし、しけひらの能に「をにそつく成、をそろしや」に「つく成」と
つゐて云はゝ「をそろ」の「ろ」ををさめていふへし、「つく成」とすくに云はゝ「をそ」の「そ」に
心を入れてつきていふへし、にしき木のはしめのうたひ「くやしきたのみ」の「き」あたらぬ也、
すくに云へし、いたはりて云所をにする程にのふる也、つちくるまの曲舞、こはれそんし一有、
ねん比すへし、六代に「なにをかたねと、おもひ、この」こゝにはこは枕ををくへし、今程心ひ
やうしといへり、「をも」の下に、こは枕を一をきて、「おもひこの」「ひ」を二ッくへし、こゝは、
心をしつめて、露程も心のちりあらは、わろかるへし、「天も花にゑゝりや」「り」とさりて「や」
とうたふべし、「しるしの松なれや、有難のな」の「有」もじうつり也「風波のなんをたすけしは」
こゝはわうしゆわうとゆく所也「いかなれは、道のくには」の「は」ひきする、きたなし、此「は」
をはわきにてひく也、「あしかりや」同事也、かやうのふるきうたひに「春秋を、まつにかひなき
わかれかな」此「はる」の「る」を入へし、「何とか、ひぐん圓月の、光のかけをしめ」かやうの所、
曲也、ちうに云へし、此一うたひ、かゝりて、かるくうたふへし、「さつなも」なとをも、をさ
なくとくるへし、松風に「月は一、影は二、みつしほ」の「みつ」とうつる所にこは枕をちとも

つへし、こは枕とあらはれたるはわろし、心ねにもつへも、さくら川に「くもるといふらん、」
これはかひなめらかす所也、「もとのふるねや、のする寛」なと、「へいさのらくかん」かやうの所
をなし、したのねにて申所也、と喜阿申ける也、もじにてをくる、きたなき事也、きにてをく
る也、ことによるへし、又、人の前にて、道のもの集會して音曲する、大事也、人の家にて、
ふちしゆといふ白ひやうしうたひしとき、なかくと云をさむるにほひより、「ちよさ風もしつ
かにて」とうたひ出しけるを、みなくほうびせられし也、あなたをしよになして、小うたひ
なと云をさめたらは、はたとあけてうたひなとし、かくの地かへて、其にほひを心にかくへし、
あなたの云をさめの字のねんを、能能こゝろえへし、あるき所にて、酒もりの時、せと有に、
いく度もことはの下よりうたひ出しけるに、心隙なくうたひを用意しもちたる、かくてこそと
うくん有ましけれとて、ほうびせられし也、きをん會の時、若、御所の御前にやまいるへき、
ないくよういの時、喜阿來りて談合せられしは、ことやく人もなからんには、祝言一うたひ
過て、さしことのじよりうたふへし、くせ舞有うへに、よのさるかくあらんには、祝言一う
たひ過て、鶏て「人わう五十代」と、曲舞よりうたふへし、と談せられし也、
一、位の事、風曲集云、むもんをんかんは、うもん共にこもるかゆへに、是を第一とす、有も
ん音かんは、むとくまてには、きはめぬ所の殘るかゆへに第二とすと云々、其くらいとは、四

しやう、りよりつより、句うつり、もじうつり、と〳〵くきはめつへくして、やすき位に成かへりて、其色々は、意中の正根にこもりて、さて、聞所は、こはかゝりのむきよくをんかんのみ成所、是無上也と云々、又、不覺のむもん有、それにてはなし、其は音曲聞さめすへし、されは、たゞうつしくぎんにかなひたる音曲、上くわ也、曲はなき也、いたり〳〵て、やすき位に成て、ふしよりしせんにいてきたるもの也、かけのやうなるもの也、然を人の曲を面白しと見て、曲をたいにして、けいこする、淺ましき事也、松風に「よせてはかへるかたをなみ、あしへのたつこそは、立さはけ、よもの嵐も音そへて、夜さむ何とすこさん」なと、面白し、なれ共、はや第二におつ、此「よものあらしも音そへて」よすへし、こゑこはき位有、うへよりいひておとす也、喜阿かゝり也、此ふし、喜阿かゝりうたふ人は、猶好むへき歟、下より「よさむなに」と云は、細河右京兆なをされし也、いなりの能のころ也、此ろんき、むかしのとうゑいのろんき也、音曲にかみふるやう成と、其くせ〳〵の面白也、又、たゞと、白こゑ共いふ、いふものなし、上の位也、ならふべきことにあらす、喜阿も「なにはのあし」と御しやうくわんこそ、返々もやさしけれなと、大かたに申ける也、「眞實に成かへり、一ちんも心なく、さねもりなとに、名もあらはこそ、なのりもせめ」なとやう成、むかしもなかりける也、此「せめ」さた有し所也、いつれと申なから、殊にかゝる位、世子一人のもの也と、右京兆もおほせける也、

欠

MISSING

は大くち也、うし大夫はかいこいかんとては、つゞみ打のかたへひきつゝ、つくはひてはなか
試みて、をきつゝめ打とめさせ、こゑあはせていひ出しける也、ことばいひ次第取て、又とば
をいふと、二ちうに成所を知べし、次第の後、聽うたふべし、たゞわきのしても、きやうけん
も能の本のまゝ、何とをもいふべし、もんまうにして、りんせつまし故にわろし、後のくは
のはしかゝり、さしこゑ、一せいよりうつる所は、わきのしてのもの也、うけ取所わろきは、
わきのしてのなん成べし、わきの能過、二ばんめなどは、そう二人もよし、三ばんに成ぬれば
そうなどはひとりに過べからず、女能には、小袖をもなか〳〵とふみくゝみ、はたきのねりな
どをも、ふか〳〵と引まはし、とちて、くびすち、下はたゝをみすへからす、はたきをわかは
たにしるすへし、かつらをひのひろきたに見くるしきに、あかきをひなとする、返々しよし也、
又、をびなとのさき、かたちに成所、こゝろふへし、かりきぬのときは、したになるとて、ゆ
るかせ成へからす、能々、色とりにて、風せいに、成ことこゝろふへし、ありとほしなと、た
いまつふりかさしていつる、かんよう、こゝ計也、あふきなとにてしては、わろかるへし、花
かたみの能には、花かたみを、いかにもしつすへし、常もりの能、船をあをねりぬきなとにて、
ちとかさるへし、すみた河の能、あまりに、はしめはいろなきのふなれは、此旅人なとには、大
くちをきんもよろしかるべし、うかひのはしめ、ひためんに竹かさる、かやうのことは、い

なかなどにての事也、時によるへし、又、能にあまりにめなれたるすかたをかへんとて、すかたをかふるを、見つけぬとて、おしていつものやうにする事、一へん也、くろかみ、今程あまりにおほくて、目につく也、能によりて、ふせいをちゝと色とりかゆへし、せいなとのひきゝもの、わきの大臣なとに、かさ折をおりくゝめなとしてきる程に、いよ〳〵見くるし、たかゝらんしては、又こゝろふへし、近比、あふみ(岩とう也)か京中にくわんじんのとき、船のかいに、きぬやらん、ぬのやらんにてつゝみて、上ををひにてからみしをみて、さしきに、見物衆の有しか、其まゝかへられし也、かやうのことこゝろふへし、犬王、柴船の能に、二そをたぶ〳〵とけつりて、ふるさしに成てきし、面白かりし也、近比、將軍家御前にて、人(三郎也)のかねの能をせしに、南むき成に、かねを右のかたにをく、左かねにつきし也、いく度も、左にをきて右かねをつくへし、又さかかみの能に、みやのもにくるはんこと、すかた大事なりし程に、水衣をたみてきし時、世にほうびせし也、それより殊ほかにはやりて、鹽くみなと云のふにきる、はなはたをかしき事也、のふによりてきへし、こうや上人の能なとに、きんしやをほうしにきる、是も何とやらんわろし、たゝすみほうしの、ぬいものをりやくして、としよりし小さらかしてきへし、衣なともうすすみなんとにそめて、きへし、犬王、念佛のさるかくに、きぬの衣に、なか〳〵たるほうし、ふか〳〵とせし、面白かりし也、又、兒なんとをは、はにいたすへからす、ことにろくをん院御きさらひ有し也、然共、こゑにつきいてすしてかなはすは、大くちをきせて、やく人つれていつへし、したにてうたふものは、えほしきへからす、大せいにまきるゝ也、くはしくはきしたるさうしを見るへし、人、何としてもおもひなしと、能をくちかうこゝろふへし、幕屋まくやなとをも、能々ふたきて入にみせ度もなし、女なとに、うつくしく成たれ共、まさしく、幕屋まくやにてはたかに成て、大あせたらけなれば、にほひすくなくおもひなしわろき也、うちにての音曲には、さた心し、みきにあふきを持て、右にはしやく八をつかゑられしか、しやく八の口を、衣の袖のうちに引入、をゆひにて、衣の袖のくちをおさへられし也、貴人の御前なとにては、ひさまつきもせられし也、かやうのことは、なを〳〵能々たつぬへし、ひうち袋はきんらん也、かやうのものまいの色に成也、

一、めんのひたい、長こと有ましき也、今程、おしきとてきらざる事、おかしき事也、かみにものをきるにえほしかぶりなれば、ひたい中にきるものなれば、のきたるは、ともいに成てわろし、かしらをかけたれは見へず、亂れたるかみの中よりみゆるにつけて、ひたいたかきはわろし、ながか覽めんをば、うへをきるへし、

一、習道書に、種々の定めあれば、委細かきをかず、笛のことにつき、としよりわらんへと有は、觀阿、世阿兩人のこと也、せうしやうの能とて、丹波の少將き洛有て「おもひし程は」のう

たよみたる所の能也、又、きやうけんには、大つち新座のきく上くわに入し物也、はつわかの能に、（きく）此能は、子をかんたうしけるか、おやのかつせんすと聞て、ゆひの濱にて、かつせんして、おもてをひたる能也「あのめしゆうとは、いかなるものぞ」といはれて「をそろしく候」と立よりて見れば、はつ若也、それよりしめかへりて、おやに此よしをつげしおもひ入、其比ほうび有し也、きやうけんも、かやうの所をこゝろふへし、後のつち大夫は、ろくをん院御覽し出されたる者也、きやうけんすへきものは、常住にそれに成へし、きとして、俄にきやうけんにならは、おもひなし大事成へし、後のつち、北山にて、公方人たかはしにて行合たるに、つちよるとて、あふきかさしてとをられしを、そはへよりて、そと見て、又あふきかさして、われもとをりし、かやうなるこゝろぬ、しやうすの心也、

右、以上、出世上果之風義也、

一、いなかの風體、金春權かみ、こんかう權のかみ、つゐに出世なし、京中のくわんしんにも、將軍家御成なし、こんはる京のくわんしん、二日してくたる、こんかうなんとにては、立合の時も、二はんにて、さてをかる、是も、其比、道のさかん成ときの、上の手から一のこと也、今の世は、道なくて、日比能せぬものも、殊によりておしちしてする、出世にはかはるべし、こんからかさ有しして也、あまりにかさ過て、くわちやう成所有し者也、こんはるは舞をはえまはさりし者也、くせことをせしして也、あふきたゝかせ「なるはたきの水」と云て、舞さうにて「わかこ小二郎か」と云て、さと入などせし、何共心えぬよし、其比さたす、「きりの花さくいのうへの」とて、かさまへにあらきとみし、さやうの所を心にかけてせしして也、こんからのかたより、あまりのこととてなんせし也、うちのまいなとをも、ちら〳〵きり〳〵と、かへりなどして、とゝめし「そも、かやうに曲すへきさしきか」とあか松はらなと申されし也、「あら、なつしのあま人やと、御なみたをなかし玉へは」此「御なみた」のふしこん森かふし也、あまりにくたゝ敷ことをは、なか〳〵かきのせす、同しのうに「ちの下をかい切、玉をおしこめ」なとのかゝりは、黒かしらにて、かる〳〵といて立て、こはたらきの風體也、女なとにはあはず、こんがうは何をもせしもの也、ぜうのかゝり也、ろんきそゝろとうたひし所也、雲林院の能に「もと常の、つねなきすかたに、なりひらの」とて、たいまつふりあけ、きといなりし樣、南大もんにも、うてさりし也、あふみの別當が舞をにせける也、舞さり〳〵たふ〳〵と、ねちつけてまいし也、彼りやう人こと、ひそかに聞し事なれ共、京ねなかせん惡をわきまへん爲に、かきをく所也、是さへ、くはしきことをはかきのせす、うちの舞にも、ひざひやうし、ひざかへりなと、京にてせしもの也、又、十二とんのかみ、けさんい也しかとも、しせんに中上にものほりしとき有し者也、世子一言によりて、鬼を（原注さいとう）をえてせし者也、正ちやう元年に、

御前にめし出されて、のふよかりし時、世子のかたへしやう有、其しやうの文しやう、
久けさんに入らすゝ御ゆかしく存候、此度長々御目にかゝり、くはしく申度事候て、兩度參
ゝへとも、御出の時分參候て、御見參に入す、所存のほかに候、此度めしのほせられ候、
當年のことは、いよ〳〵老もう仕候、かた〳〵しんしやくにて候、其よしをも申候へども、
上意にて候て、不及力、參、度々能仕候、上意其ほかの御さた、子細なく候事、老のめんぼく
にて候、兼又、かやうの事につけ候て、申度子細候、かやうにとしより候迄も、子細なき御
意に預候事、一向御扶持にて候、先年身の能の事御し南を憑入候しに、うけ給候し、北山の時
分、御戀にうけ給候し事、いまにわすれす候て、其心にて今まで仕て候、乍去、たとひ其心
候共、身にゝあはぬ能をは候はんには、今程の御意にあひ候ましく候、身のため、えてむき
の能あまた御かき候て、仕をきて候、左樣の能とも皆々人々もしられて候、人の御能にてはあ
ふましく候、あひたる能にて候はすは、えたるつほへは入間敷候、是一向御ふちにて候、心中
に存候事申度候て、兩度參候しに、御留守の時參合候事御心元なく候、身は本よりかたかな
をも、えかゝす、狀更になを〳〵かきゑす候程に、人にかゝせ申候、定てことはにたるまし
く候、參候て申度候へ共、御いとま申して候、長々逗留不可然候て、夜のうちにくたり候程
に、狀をあつけをき進之候、ふと御下向も候はゝ、懸御目、くはしく申度候、期見參時候恐

々謹言、

八月四日

康次判

又袖かき云、猶々、かやうの事、狀には申立かたく候、御めにかゝり申へく候、身の一期の
事、御扶持、孫子までもわすれ申間敷御ことにて候、返々畏入候、

（うはかき、こし文也）

十二

世阿彌陀佛へ進上

道をもてるものゝいち、如此、犬王は、毎月十九日、觀阿の日、出世の恩也とて、かうを二人
くやうしける也、觀阿、いまくまのゝ能の時、さるかくと云事をは、將軍家ろくおんゐん、御
覽しめらるゝなり、世子十二の年也、
一、めんのこと、おきなは、につくわううち、みろく打ち也、此座のおきなはみろく打也、い
かをはたにて、さをたてそめられし時、いかにてたつねいたし、たてまつしめん也、あふみに
は、しやくつるさるかく也、鬼のめんのじやうず也、近頃ゑち打とて、させんゐんの打、うちの
もの也、女のめんじやうす也、ゑちぜんには、いしわうひやうへ、其後たつゑもん、其後やし
や、其後ふんざう、其後こうし、其後德君也、いしわうひやうへたつ右衛門迄は、たれもきるに子
細なし、夜しやより後のは、さてをきちふ也、こんかうごんのかみかきしふんざう打の本うち

也、此座に年よりたるぜう、たつ右衛門、戀のおもにのめんとて、名よせし、わらひぜうは、
夜又 やしやが作也、おい松の後などにきざは、こうし也、ゑちの打し面共、打て、あふみさるかく
に遣ゆいもつしけるが、やまと名人とて、世子のかたへいわとうして、送りしゆいもつのめん、
今寶生ぼうしやう太夫のかたにある女のめん、かほほそきぜうのめん、是也、とき〳〵けんさんみ
に、彩色さいすきてきられし也、おとこめん、近比よきめんとさた有し、ちくさ打也、君おとこめ
んはたつ右ゑ門也、く阿井のとひて、此座の天神のめん、大へしみ、小へしみ、皆しやくづる也、
大へしみをは、他國よりは、やまとべしみと云、此めん也、大へしみ、天神のめん、もつはら
觀阿よりのち代のめん、とひては、かんせうじやうの、じやくろ、くわつとはき給へる所を
打、天神のめん、天神の能にきしよりの名也、人のかりめされしと、ふしき成れい夢有てかへさ
れしめん也、家にをさめたてまつれ共、又れい夢有て、今もきる也、小へしみは、世子きいた
されしめん也、よのものきへきこと、今の世になし、はめんにてうかいをはしいたされしめん
也、ことめんにては、うかいをほろりとせられし也、めんも位に相應たらんをきべし、此座の、
世老ちと年より、しゝ有女めん、越智?ゑち打也、世子、女のうには、是れをきらふへし也、猶名よのめ
んともあるへし、

一、やまとさるかくは、かうかつより、すくにつたはる、あふみは、きのかみとて有し人のす

ゑ也、さてきうち也、時代能々たつぬへし、やまとたけたのさとあいのさ、はうしやうのさと、
打 竹田 氏 大和 竹田 座 安部? 座 寶生 座
うち入〳〵有、たけたは、こんぽんのかうかつよりのめんなと重代有、てあいのさは、先は山
田 河勝 面 手播?
たさるかく也、伊賀の國、服部の杉の木と云人の子息、おゝだの中と申人、やうしにして有し
か、京にてらくいはらに子をまうく、其子をやまた小みの大夫と云人やうして有しか、三人の
子を寶生、ちやくし、中、おと、山田 美濃 養子 流 田
子をまうく、ぼうしやう大夫、生一、觀世、三人此人のなかれ也、彼山たの大夫は早世せられ
金剛 竹 鎌倉 尊
し也、こんかうは、まつ、たけとて、二人かまくらよりのぼりし者也、名字なし、猶たつねて
上 流 増 座
記きしおくへし、近江宮あふみは、見ましのさ、久座也、山科は山科と云所のかせ侍成しか、見ましかむ
娘具? 社 坂 面 所 島 増
すめをかして、さるかくに心さして、山科の明神春日にて御座せば、籠て、進退をいのる、か
上 嫡子 坂 面 上 上 比叡 玉
らすしやたんのうへより物を落す、見れば、おきなめんにてましまし、此うへはとて、さるか
流 領 夫婦 連 籠
くに成、ちやくしをは山科におき、をとゝをは下さかにをき、三男をはひえにをく、其より三
面 昔 於 勤
座のなかれと成、然共、山科そうりやうなれは、日吉の神事、いまに正月朔日より七日にいた
面 頓死 璃生 下 坂 除
るまて、山科獨しておきなをす、彼めん也、此能は、むかしの山科、めうとつれて大晦日にこ
岩 宜 氏 下 坂 宮 増 森 酒 人?
もりし時、三歳に成子とんししければ、末代迄子々孫々にをきて、正月朔日さるかくをつとむ
へきと、祈念しけれは、そせいせし、其願也、今のいはとうをうちしもさかと云名字をのそき
て、日吉と號す、近比、山よりのけちといへ共、無念成こと也、みまし大もりさかうと、下三座、

丹波のしゆくは、かめ山の皇帝の御前にて、申樂をせし時、長者になさる、新座、本座「法勝寺の三座の長者也、道の面目何事かこれにしかん、かはちの名なみのむまの四郎は、かちゐ殿やらん(原注、能も不覺、重ねたつぬへし)馬のもんを給はる、道阿の道は、ろくおんいんの道義の道をくたさる、世阿は「ろくおんゐん、觀世のときは、世にこえたるこゑ有、爰をきほ」とて、世阿とめさる、其比、まてのこうち殿、ぶゑいひやうこにて、御いぬのけんミに、將軍家御ちやくちやう、し筆に、先くわんれいとあそはされしより、今に先くわんれいと云、をなしやうに御さた、世子めんぼくのいたり也、龜阿は、かめやしやと云しによりて喜阿と也、觀阿は、けんぞくのち、早世あり、

一、應永十九年の(原注としよくも不覺、重てたつぬへし)しも月、いなりのほうしやうしおうちの、たちはなくゝのくいあやまちより大事に成て、まかるべき時、いなりの明神つき給ひて(原注女ばうたち也)觀世にのうをさせて見せは、平ゆ有べきと神たくにて、いなりにてさるかくす　彼女しやう云「十ばんすへし、三番をは伊勢に見せたてまつり、三はんを春日に見せたてまつり、三番をは八幡にみせ奉り、一番をはわが見へき」と神たく有て、十ばんせし也、世子彼家に禮にまかりしを、うちにて「觀世來りたり」とてめし入れ、あかきゝぬをくたし玉はる、今に此きぬあり、又、應永廿九年霜月十九日、しやう國寺のあたり、ひはた大くのむすめ

病おもかりし時、北野せい廟より霊夢有て「こちふかば」のうたをかうむりにをきて、歌をよみて(原注すゝめうた也)觀世にてんとりて、神前にてむへきと、顯然あらたに見しかは、うたをすゝめて、えんを取て、世子にてんをとる、いなみかたくて、きやうすいし、合點せし也、其比はゝや、出家有し程に、夢心に「觀世とはいつれやらんとおもひしを、世阿成」とおふせけると、みて有けるとなむ、又、ふちわかと申ける時、やまとたふのみねのしゆとの、重代の、天神の御自筆の、彌陁のみやうかうを、天神より、れいむ二度に及ふとて渡さる、いまに是有、もんじはてい也、かやうの事ことくしきやうなれ共、道の神にとうする處のしせうのためにかきのす、とをくは秦の氏安、はつせのりうさうこんけんの、なうしう有しと申つたへし後、かやうの事聞及はす、

一、田樂は、さかの上のりやう阿法師、山のりきしや也か、たうたうにまいりけるに、ひらきかさき、あかきものきたるもの、ばうのさきにのりかたなをめくらすをみて、青蓮院にて申けれは、さらはなゐちまなふへしとて、十三人のりきしやこれをまなふ、それより此道おこる、有せつには、日吉御りんかの御ときに、御ともせし何とやらん(原注可尋)のなかれ也、それにより、今に彼神事に、田樂三人、黒きめんをくひにかけて渡る也、一忠いせん、たうれん、かうれんとて、名人有ける也、いつれも本座の者也、はなやしやふちやしやは新座の者也、

一、松はやし（離）、今はいへなし（家）、さをんのゑのとき（祇園會時）のこと、本になるへきを、永享二年正月、御所の御まつはやし（松離）に、たれも家なしとて（誰）、少々世子にとうをん（去也）、とのふし（此？節）祝言にてすく（直）成へし「松は、風をさまりて（治）、雲もい（去也）り山、〳〵、さかゆくみよの（榮）、はなころも（花）、はるそめてたかりける」かやう成へし、扨は、今度はちとなか（些長）〳〵りしなり、

一、南とたき（都薪）〳〵の御神事は、むかしは時せつさたまらす（昔節定）、夏なとも有し也、されはあふさるかく（逐猿樂）なかりし程に、清次をめされて（召）、御さうめい（札明）有へきよし（由）有し時、子細を申、其時より「けにも（實）、申樂、かんにん（勘忍）、ふびん（不便）」とて、二月になさる、其時「二月ならは、末代かき（缺）申ましきよし」定申しゝあいた（問）、此座にをきて（於）、二月の神事ならはかく（缺）へからす、

一、永享元年三月、たき（薪）〳〵の神事こに（後）、一ぜうゐん（乘院）にて、圓満井、魚崎（魚（結）崎）、兩座立合のとき（時）、わきはくじ也、ゆうさきとり（取）あたりて（中）、觀世太夫（原注、元雅）八幡はうしやう（放生會）ゑのをすへき（書？）、神？それも先年しむの能をひく（住）、大せう院（乘）へは、一座〳〵参りし程に、わき（脇）のさたなし（沙汰）、

一、さるかくじやうじ（猿樂常住）のあり（往來）きに、今程、小ものに（餽）、たち（大刀）をもたせて（持）有、にあはぬ事也、道阿、小ものにうちかたなを（懐劍）（以下缺）

世子猿樂談儀校註　正誤

八頁八行ならひノ下ニゐヲ補フ○同頁十一行入ノ下ニりヲ削ル○同頁同行うしくまノ下ニかヲ補フ

○九頁十二行物うしノしハくニ正ス○十二頁五行しねノ下ニんヲ補フ○同頁十三行つきしノき（自然）ハけニ正ス○十三頁十五行彼の鬼ノ彼ハ後ニ正ス○二十七頁五行山云ノ間ニとヲ補フ○三十四頁一行くときノ下ニ也ヲ補フ○三十六頁十一行ところふへしノ下ニ

せんこし（前後）〳〵（書）かくにも、あまりに（餘）、ふつきりに（打切）、ついたるやうには（附樣）、有ましき所を、こころ（心）ふへし（得）、

ヲ補フ

世子猿樂談儀校註　附錄

吉田東伍

本書活版既に成るの際に至り、岡田紫男氏の仲介に緣り、安田善之助氏所藏の他本を獲たり。其の書體紙質を考ふるに、中古寫本に屬し、再三轉を經し者に似たり。後尾殘闕し、譌誤繆錯すること、大抵小杉氏手寫本に同し。然れとも、完本異本の未た現れざるに方り、類本と雖、古寫に係る者は、以て讎校の資料に供すべし。即、安田氏本を採り、更に校註本に對して、字句の異同を比較し、其の重要なる者を擧けて、讀者の參考に備ふることゝす。

安田氏本は、包紙、達磨屋五一の筆にて「觀世大夫傳來、申樂談儀、康正年中之書、凡四百年古寫本」云々と題す。然れども、此の本、康正の古寫と爲し難し、恐らくは三百年に過ぎじ。蓋、柳亭が、觀世家譜を援き「世子とは世阿彌元清なり、康正元年卒、八十一」とあるに因り、達磨屋、漫に觀世大夫傳來、康正之書と云へるならん、深く究めずして可なり。又、柳亭の題言には、

「文政紀年、此一帖を下谷山下ノ星店ニ得タリ、類本未見、檢校保己一、此書ヲ三轉シテ文庫ニヲサメリト聞ク、四百年ニ近キ古記、珍重スベキ物歟、　高屋彦四郎知久記

と有て、當時、塙氏(檢校)が類本を有てること、之を以て知らる。而も、其の塙本は、黑川氏小杉氏を經て、今の校註印本と爲れり。文政未見の二類本、茲に校合の奇遇に會ふは、何等の倖運なるかな。

頁	行	小杉新寫本	安田古寫本
7	1	かくら。	かくを
	2	いつれと。	いつれを
	5	うるはしき	うるわしき
	6	くらゐ。	くらい
	11	よみきらう	よをきらう（餘）
9	2	かつかう。	かつかく
		ゆつく	ゆいて（結）
	4	しはふきて	しはふき一し
	5	すまいをなし、	すまは、をなし
	13	しやく八一く	しやく八一て（手）
	14	ひらにひみたり	ひらにひえたり
10	3	柳うらのきぬにゆ	柳うらのきぬふみ
		みくくみくる田う	くくみくるまうゑ
		ゑの女にんは	の女にいは
	8	とにうれしは	とにそれらは

頁	行	小杉新寫本	安田古寫本
11	9	ひくう	ひてう
	12	いしやうしらへ道	いじやうして道は
		は有とと	有を
		もりうた	もりかた
	8	直	立
	11	とよすす成してな	とよすく成してな
		り	り
	12	きも〳〵しとせし	きも〳〵とせしな
		也	り
	13	わきはしらとせし	わきはしらをせし
		也	也
12	1	さんくう	せんくう
	9	さいとうけふ	さいどうふう（風）
13	3	位のほしは	位のほらは
	7	ありとをしとも	ありとをしの
14	6	一み	一て（手）

	17	せめとは	せめをは
	15	でんくわん	てつくわん
15	1	しさい	じせつ（時節）
	5	にいりて	にはかに（俄）
16	3	よりてかへると云	よりてかへると云
		所	とき
	6	ゆるやかに	ゆくやかに
17	10	ひ若ときを見もせ	ひ若ときを見わけ
		ぬ也	ぬ也
	11	ちと	そと
	15	うつことに	うつてみて
18	15	わらかや	わらくや
19	11	くもつまり	てもつまり（手）
19	15	みか有て	みえ有て
20	7	なく	なかく
	14	さらに	さうに

21	4	やう〳〵と云こゑ	やう〳〵と云こゑ
		どいふその有のを	をいふもの有、の
		たち心よりいづ	せたる心よりいづ
	5	ちきに	出きて
22	5	一つ——妙果と	一心——妙果を
23	9	こふくふし	こふたふし
25	13	ゆうにほう	ゆうこほう
26	8	ひさしく	ひさし、久
28	12	いやよ	はやよ
	14	こゑかゝり	こはかゝり
29	3	こわたし	こはたし
	6	うつを、	、うへを
30	1	ふかくも淺くも	ふかくても淺でも
	6	こはれそんじ	こはきもんじ（硬 文字）
	8	二ツをくへし	二つくへし
31	7	かくの地かへて	かくちかへて

	9	とうくん	とうてん（動轉）
32	1	きはめつへくして	きはめつくして（盡）
33	13	ほんからて	つんからて
34	11	ちくと	ちゝと
35	1	心うけはゝせられ	心にけはくせられ（緊縮）
		て	て
	10	つるきや	つよき也
36	3	みくて	云〳〵て
38	14	應永二十年	應永三十年
39	12	こは〳〵しく	てば〳〵しく
40	4	大夫にてなくては	大夫にてなくては
		して	とて
41	2	をきつゝめ	をきつつみ（鼓）
	4	くは	ては（出端）
	9	しよし	しよく
	10	かたちに	かたち〳〵

43	3	人何としても	又何共としても
44	4	しめかへり（紛）	しめりかへり（濕?）
	14	おしちして	おし出して
46	5	上意に候て	上意に候間
	9	能をは候はんには	能を仕らんには
47	3	申へく候	申度候
	7	かう	そう（借）
	9	御覧しめらる	御覧はしめらる（初）
	14	德君	德若
48	5	君おとこ	若おとこ
	6	く阿井	て阿井
	8	觀阿よりのちゝ代	觀阿よりのちう代（世）
	11	はめん	彼めん
49	1	たけたのさとあい	たけたのさてあい
		のさ	のさ
	3	おゝたの中	おうたの中

8	御座せは	御座歟
50 5	まてのこうち	かけのこうち
51 5	なし	云々
10	へき	塗抹

此兩本校合の後、觀世座の前名、あいとてあいの是非、如何を顧念したるに、安田氏古寫本には、明にてあいと爲す。されど、安田本も固より完書に非ず、所々誤謬を交ゆれば、必しも之に判決を取らず。面の相傳の條に、安田本には、

て阿井のとひて、此座の天神のめん、大へしみ、小へしみ、皆しやくつる也、云々、（四八頁六行）

とあれど、此に此座といふは、即、世子の觀世座のことなれば、上のて阿井は、必定、圓滿井（竹田）の座ならざるべからず。諸本轉寫の際、誤謬を招きし者、かくの如きの例猶多からん、要は讀者の眼識に頼むに在り。

18
868

明治四十一年七月十五日印刷
明治四十一年七月二十日發行　（非賣品）

東京市牛込區船河原町十二番地
著作兼發行者　池内信嘉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　飯田三千太郎

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

과 9019

18
868

世子六十以後申楽談儀

国立国会図書館

075016-000-4

18-868

世子六十以後申楽談儀

泰元　能聞/書

M41

CEL-0941